

日本学術会議 課題別委員会
高レベル放射性廃棄物の処分に関する検討委員会（第3回）議事要旨

日 時：平成23年1月12日（水）10：00～12：00

場 所：日本学術会議 6－C（1）会議室

出席者：今田高俊 委員長、山地憲治 副委員長、柴田徳思 幹事、船橋晴俊 幹事、
入倉孝次郎 委員、小澤隆一 委員、小野耕二 委員、木村逸郎 委員、
斎藤成也 委員、桜井万里子 委員、清水修二 委員、千木良雅弘 委員、
中西友子 委員、長谷川公一 委員、濱田政則 委員、矢川元基 委員

説明者：山口幸夫（NPO 法人原子力情報資料室理事）

配付資料：資料1 前回議事要旨（案）

資料2 高レベル放射性廃棄物に関する市民団体の活動状況について

参考資料：参考1 委員名簿

参考2 高レベル放射性廃棄物の処分にかかる安全規制の基本的考え方について（第1次報告）

議事：

1) 委員の紹介

今田委員長より、今回から審議に参加する清水修二特任連携会員及びの長谷川公一特任連携会員の紹介された

2) 前回議事要旨（案）の確認について

修正点 1 頁 東陽町ーー>東洋町 に修正した

3) 市民団体の活動状況について

山口参考人から、資料2に基づき、高レベル放射性廃棄物に関する市民団体の活動状況について説明が行われた。

主な質疑及び委員の意見は以下の通りであった。

- ・地域住民の方が専門家を信用していないこともあるが、専門家も地域住民の方に説明しても分からないだろうという不信感があり、相互不信となっている。
（答）相互不信について、相当勉強している市民に関しては、相互不信の問題は少ないと思う。明治初期の頃の科学・技術が目指したものと、現在のそれは相当変わってきていると思う。市民の目線がどう受け止めるのかが、欠かせない状況になってきている。
- ・一般の建築物等は、50年、100年のオーダーで考えており、500年、1000年とかの長い期間に対して地層処分の安全性を保証することは、ほとんど不可能である。（答）多くの市民、住民は、直感的な恐れというものを持っていると思う。
- ・市民と専門家との協働、これは大変貴重な示唆だと思う。今までは、事業執行者側と住民、これが対峙型であった。そこに、ファシリテーターみたいな第三者の科学者や第3者機関が入って、議論していく体制は是非とも必要だと思う。
- ・「どこかに最終処分場が押しつけられ、将来の世代に対する時限爆弾をしかけるような乱暴な処分」について、現状では、廃棄物が仮置きされているので、時限爆弾が既に仕掛けられていることになる。これについて、どう考えられるのか。（答）時限爆弾という考え方は、反対運動全国連絡会の人達の共通の考え

方であり、私自身は、ズーッと時限爆弾だと思っている。

- ・現時点で、放射性廃棄物の地層処分に対する代替案を提示願いたい。(答)推進側と反対派の間の理性的な議論に行われた例は今までほとんどないと思う。十分な議論を徹底的に行い、その共通理解さえ得られれば、もっとも有力な方法の一つは地層処分だと思う。又は、地上管理を続けるという考え方もある。
- ・「原子力の専門家の言動への不信」について、推進側の不信を招いて来た典型的なやり方、言動について、具体的にどういうことか。(答)例えば、柏崎刈羽原発で、塑性歪みが残っている可能性があるという議論になっているが、慎重な専門家はグレーゾーンが残っているとし、推進側はグレーゾーンはないという。余裕の定義が明確でないのに、安全余裕が 30 倍も 40 倍もあったという発言をされた。双方が同じ場所で徹底的に議論する場がなく、言い放しになり、そのまま進んでしまうという仕組みが良くないと思う。
- ・グレーゾーンについて、私達がものを設計するときに、100%これは安全であるということは、絶対あり得ない。市民、住民の人と話すときに、100%安全性を保証しろという議論に時々なる。その辺に齟齬があるのではないかと思います。
- ・専門家同士の議論を一般国民が見ているということは、専門家は一般国民を意識せざるを得ず、ゼロリスク論を言いがちになる。そこが不信を招く一つの契機になっているのではないかと思います。
- ・リスク論から人間の心理的な問題として、原子力発電所など、ゼロリスクなんて科学的にあり得ないんだと言われても、ゼロリスク要求をするという精神構造はある。
- ・設計科学と認識科学、学問には大きく分けて2つの形、在り方がある。実際に社会に必要なものを創るということには、設計科学という考え方を全員で共有しなければならない。
- ・原子力発電の是非はさておき、とにかく目の前にある廃棄物をどうするんだという問題の建て方は、かなり難しい。この問題が、核燃サイクルの中の問題だということは、否定できない。
- ・原子力発電そのものの是非に固執することが、かえって高レベル放射性廃棄物の問題解決を遅らせているという見解もある。原子力発電の問題は継続審議にし切り離して、放射性廃棄物の問題を個別的に処理するという考えもあり得る。
- ・この問題を理性的な議論に中々載せられない事情の一つに、原子力発電所や原子力発電関連施設の立地が利益誘導型で進められてきたことに対する地元の強い嫌悪感がある。(答)住民運動、市民運動みていると、お金でとにかく突き進めるという時代は大きく変わってきた、これは、わりと全国各地共有されている考え方ではないかと思う。新しい時代に入ってきた気がする。
- ・高レベル放射性廃棄物問題は解決しなければならない、その最終処分場は造らないという選択肢はないという共通認識から出発して議論をして行くべき。
- ・ガラス固化体にしない、再処理しないで直接処分するという形で地中処分することを考えている国も最近は多いのではないか。ガラス固化しない、再処理しない場合と再処理する場合とで 地中処分の在り方がどう変わっていくのか。
- ・政府などの情報の公開の現状や要望は。(答)半年とかそのくらい待って、国が

ら出てきた資料がほとんど塗りつぶしてあるということが、なくなってくればいい。出てきたものを見ると、何でこんなものを隠しているのかということとはよくあるので、過剰に警戒しているのではないか。本当に時間がかかる。

- これまで電力事業者が色々隠してきた、その一つが地震の記録。地震の後で初めて柏崎刈羽の地震関係資料が公開された。公開されて何にも問題はなかった。
- 原子力委員会からの委託は、高レベル放射性廃棄物の埋設の取組における国民に対する説明や情報提供の在り方についての提言をとりまとめるということ。
- 山口参考人の話では、残念ながら原子力については、従来、徹底的に議論する場がなかった、あるいは、極めて不十分だった、そして情報公開を踏まえながら徹底的に議論すべきというご指摘があった。
- 高レベル放射性廃棄物の処分について、どのように国民の合意形成に繋げていくのか、どのように徹底した議論の場を作っていくといいのかをメインテーマにするべきだと思う。内容的には、合意形成がキーワードになると思う。
- 原子力政策そのものに様々な論点、選択肢があるので、それについても一通り勉強する。

4) 今後の進め方について

- 変動地形形成、活断層評価、金属物性の問題等の高レベル放射性廃棄物の処分の技術的なリスクについて一通り専門の先生方に、講演いただく予定。
- その後、徹底的に議論し、理解の上で合意形成していくプロセス等について、海外の事例等を紹介する予定。
- 本日提案のあった電源3法システムの問題点と課題等については、日程等役員会で調整する。
- 次回の日程については、事務局から調整の連絡をさせていただく。